

異なる演者による紙芝居上演に対する観客の注目の差異

柳 田 多 聞

Difference of attention of the audiences to Kamishibai by different performers

Tamon YANAGIDA

Abstract :

The quantitative investigation about the attention of the audience who watched the Kamishibai performance by three performers was made. It was revealed that the objects which the audience paid attention to varied among performers. But there was individual difference in the influence that the audience received from a performer.

Keywords :

Kamishibai, attention, quantitative analysis, individual difference

はじめに

紙芝居に見られるコミュニケーション

紙芝居の上演は、観客集団に対して対面する演者が扉のついた舞台に収められた絵を見せながら物語を語っていくプレゼンテーションであり、そこには演者と観客との間に豊かなコミュニケーションが沸き起こる可能性に満ちている（柳田, 2010）。

演者から提供される情報に対する観客の認知心理学的側面や、演者の上演技能の上達に関する教育心理学的側面や、観客がその場で行う表現行動に関する社会心理学的側面など、さまざまな心理学的問題が埋もれていると考えられる（柳田, 2011）。

観客の行動に関する質的研究と量的研究

柳田（2013）は一人の観客（5歳児）が紙

芝居を鑑賞する中で見られた行動を記録し、紙芝居の鑑賞が豊かなコミュニケーション行動を誘発する様子を示した。

その際の記述方法は、紙芝居作品の場面設定に基づく演者からの声掛けや動作を観察単位として、それらに対して認められた観客（観察対象児）の行動を言葉で記述したものであり、いわば、質的行動分析であった。それは、紙芝居上演中に生み出されるコミュニケーション行動のバラエティを記述するには、言語的な表現がふさわしいと考えられたからである。

それによって、紙芝居鑑賞中に観察対象児が見せた反応行動の内容や性質を詳しく知ることができた。内容や特徴の詳細な記述が、質的分析の最大の利点であると言えよう。

しかし、一人の演者がおこなった一つの上演に対する、一人の観客の反応行動を分析し

た、言わばケーススタディであったので、例えば、同じ演者の上演に対してさまざまな観客の反応にはどのような個人差が生まれうるのか、また、異なる演者の上演に対して、同じ観客の反応形成にどのような違いが生じるのか、などを捉えることはできなかった。

そういった観点を捉えるためには、複数の演者の上演に対する、複数の観客の反応行動を比較する研究が必要になる。その場合には、量的な記述に基づく分析が力を発揮すると考えられる。

紙芝居鑑賞中の観客行動に対する観察記録法の検討

量的な行動観察の方法として代表的なものに、時間見本法と事象見本法がある。紙芝居の上演を鑑賞する観客の反応行動の分析にはどちらが適しているだろうか。

時間見本法は、注目すべき事象や行動が幾つかに絞られていて、それらが長時間にわたる観察の中でどのように生起頻度を変えていくのか、に着目する際に用いられる方法であり、一定の時間ごとに記録をとっていくタイムサンプリング法である。

一方、事象見本法は、長時間にわたる事象の推移ではなく、特定の日に特定の事象カテゴリがどのように分布していたか、に着目する際に用いられる方法である。

紙芝居上演は一つの作品について数分という比較的短時間の記録であり、その中でどのような反応カテゴリが生起するかを調べるためには、事象見本法が適していると考えられる。

しかし、短時間とは言え、一つの作品が上演される間に、物語の始まりから終わりまでの情報提供があり、それに対するさまざまな反応行動が次々と生起するのだから、それぞれの反応カテゴリの生起頻度が上演中どのように変化するか、をとらえることにも意義があり、それには時間見本法が適していると考えられる。

したがって本研究では、時間見本法と事象

見本法との組み合わせを採用した。まず、紙芝居上演中にかなり頻繁に変化する観客の反応行動を拾い上げるため、サンプリングタイムを5秒と定めた。カテゴリ分けした反応行動の分布が5秒ごとにどのように変化するかを調べることで、紙芝居上演に対する観客の反応の推移パターンをとらえることができるからである。その反応推移パターンに、演者の違いや観客の違いによって、どのような差異が見られるかをとらえようとするものである。

次のセクションでは、観察記録する反応行動のカテゴリ分けについて述べる。

観客の紙芝居鑑賞中の注目対象

反応カテゴリとして本研究で着目したのは、紙芝居鑑賞中に観客が何かに注意を向ける行動である。

観客は紙芝居の鑑賞中に豊かなコミュニケーション行動をとりうる。それは単に、演者から観客へのメッセージの伝達にとどまらず、観客からの自発的な発話や指さしなどの動作、観客同士の語りなどが誘発される(柳田, 2010, 2013)。そういったさまざまな反応行動は、どれも紙芝居によって引き出されうる、言わば、望ましい反応行動とみなすことができる。

そのようなコミュニケーションが成立するためには、観客が紙芝居そのものに(具体的には舞台と演者に)注意を向けていることが望ましい。

紙芝居上演には、もともと観客の注意を惹きつけやすい要素が豊富に含まれている。観客に直面している演者や舞台の存在、画面の抜き差しによる物語の進行などがそうである(まつい, 1998)。

ただし、演者自身がそれらを意識的に活用できるか否かは演者の上演技能に依存する。

もしも仮に演者が観客に対して紙芝居の物語世界への誘導を失敗したとすれば、上述の望ましい反応行動とは異なる、紙芝居とは無関係な動作や外部への注意喚起の行動がみら

れると予想される。

ティア活動を始めて5年ほど経過していた。

本研究の目的

そこで、本研究では、同じ観客集団に対して異なる3人の演者がおこなった紙芝居上演の映像記録から、観客の反応の個人差や、演者による反応の違いなどの量的な比較検討を試みた。

方法

観察対象者および演者

長崎市内の一般的な私立保育園児33名（2歳から5歳まで）からなる集団に対して、3人の演者が紙芝居上演をおこなった。その様子をビデオ録画した映像の中から、紙芝居の上演全体を通して顔の表情が識別可能であった11名（男児7名、女児4名）を観察対象者（以下、観察対象児）とした。

紙芝居の演者は、大学生2名（演者A・B）、および筆者（演者C）の計3名で、おのおの1作品ずつ上演した。大学生の2名は、紙芝居上演の基本について学んではいるが、学生同士で演じ合う練習以外での上演経験はなく、保育園児を前にして上演するのは初めての経験であった。筆者は紙芝居の上演ボラン

紙芝居上演の手続き

紙芝居の上演および撮影は、2013年7月におこなわれた。観客の園児は、演者たちとは初対面であった。午後5時前後の“お迎え前”の自由時間に紙芝居上演をおこなった。同じ時間に、保育園の園長、保育士2名、ちょうど迎えに来た母親2名も部屋の後ろで一緒に観賞し、リラックスした雰囲気の中で行われた。

観客となる保育園児の撮影に関しては、保護者の了承を得ていることを保育園園長に確認し、撮影の許可を頂いた。

2台のビデオカメラで紙芝居上演を撮影録画した。1台は観客を、もう1台は演者と紙芝居舞台を撮影した。

使用素材（紙芝居作品）

3人の演者が使用した紙芝居作品の概要を、表1に示す。

実験手続きとしては、3人の演者が同じ作品を演じて比較することが望ましいと考えることもできるが、同じ観客に同じ演目を3人の演者が繰り返し演じることは、幼児である観客の自然な反応行動を観察する上では不適であると考え、異なる作品を使用した。

表1 各演者が上演した演目の概要

演者	演者A	演者B	演者C
作品名	やさしいおともだち	くださいな	るるのおうち
脚本・絵	せな けいこ	和歌山 静子	まつい のりこ
画面数	12 画面	8 画面	12 画面
作品概要	農家の馬小屋に暮らす一頭の馬とネズミたちが互いに助け合う友情の物語。物語完結型作品。	次々と果物屋にやってくる動物たちの手だけを見て、観客が何の動物かを当てる物語。観客参加型作品。	風に飛ばされて迷子になってしまった傘の「るる」の家を、観客と一緒に探す物語。観客参加型作品。

作品概要の説明にある「観客参加型作品」「物語完結型作品」とは、紙芝居作品を大きく分類する用語である(まつい, 1998)。

観客参加型作品では、作品の脚本中に、演者から観客に対して、発言や動作を求める呼びかけがあり、それらが物語の進行に直接関与する。演者と観客との直接的な会話のやりとりが比較的多く盛り込まれている。

一方、物語完結型作品では、観客の参加は物語進行には関係なく、演者が語る物語のみによって完結しうる作品である。演者と観客との直接的な会話が脚本には盛り込まれていないが、まつい(1998)は、物語完結型であっても、演者が語り掛ける間(ま)や観客に投げかける視線などによって、演者と観客とは、物語の内容に関してコミュニケーションを取ることができ、共感のひとつを味わうことが可能であると指摘する。

分析素材とサンプリングタイム

ビデオ録画した11名の観察対象児の映像を分析対象の素材とした。

3人の演者それぞれがおこなった上演ごとに、2台のカメラで撮影した映像の同期を取って編集し、「演者が紙芝居舞台の扉を開け始める時点」を観察の開始時と決定し、「演者が紙芝居舞台の扉を閉じ終わる時点」を観察の終了時と決定した。

各演者による紙芝居上演の録画映像に、観察開始時から5秒ごとにサンプリングタイムを設け、それらの時点での、11名の観察対象

児の反応行動を記録した。

各演者の上演時間および5秒ごとのサンプリングの回数は表2に示すとおりである。

分析項目としての反応カテゴリー

観察対象児の紙芝居鑑賞中の注目対象を次の4つのカテゴリーに分類した。

- ① 「紙芝居そのもの(紙芝居舞台および演者)」
- ② 「周囲の観客」
- ③ 「自分の身体や手遊び」
- ④ 「①～③以外の外部への注目」

①には、柳田(2013)で観察された紙芝居鑑賞中の反応行動である、「返答」「指摘」「感嘆」「提案」などの「発話」、「うなずき・首振り」「指差し」「表情変化」などの「動作」をすべて含めた。

②は、一緒に紙芝居を鑑賞している観客である。紙芝居は集団で鑑賞する場合が多く、自分と同じように、演者からの語り掛けに応え、物語世界を味わっている他者の存在を身近に感じるようになる。それに対する注目は、紙芝居を共に味わう共感の体験とみなすことができ、紙芝居世界への注目に属するものと考えられる。

③は、自分の身体に注意を向けたり手足を動かしたりして、紙芝居とは無関係な遊びをしている行動である。

④は、紙芝居の舞台とは全く別の物事へ視線を向けているものである。具体的に言えば、

表2 各演者の上演時間およびサンプリング数

演者	演者A	演者B	演者C
上演時間	269 秒 (4 分 29 秒)	432 秒 (7 分 12 秒)	415 秒 (6 分 55 秒)
5 秒ごとのサンプリング数	54	87	84
観客全員分のサンプリング総数	594	957	924

保護者のお迎えや、部屋の片隅へぼんやり視線を投げかけているような場合があった。

以上、4つの反応カテゴリーのうち、①と②は紙芝居上演に対する注目が維持されていることを示し、③と④は紙芝居上演から注目が逸脱していることを示すと考えられる。この注目維持と逸脱の2グループの比率が、演者と観客とのコミュニケーションの活性度を表す指標とした。

結果と考察

3人の演者それぞれの上演記録映像から、分析開始時点（扉を開く動作の開始）から分析終了時（扉が閉まる時点）まで5秒ごとに、11人の観察対象児の注目対象を4カテゴリーに分類していった。

注目対象の判定は、顔と視線の向きで筆者が判断した。「紙芝居（舞台と演者）」「周囲の観客」「自分の身体」「外部」の4つのカテゴリーは、顔と視線の向きが全く違っており、判断に迷うケースは一つもなかった。

紙芝居鑑賞中の注目対象の4カテゴリーが上演の開始から終了までにどのように推移したかを、観察対象児11人分を合計したものが、図1である。

演者3人ともに、紙芝居に対する注目が最も多く、他への注目がそれを上回ることは1度もなかった。しかし、紙芝居への注目度は3人の演者では違いがあることが見てとれる。

演者間の差異

そこで、まず演者の違いによる観客の注目度の違いを確かめるために、全観察対象児の全サンプルを、演者および注目対象カテゴリーごとに合計しグラフ化した。

4つのカテゴリー分けを示したものが図2-1であり、4つのカテゴリーを、紙芝居上演への注目維持グループ（紙芝居+周囲他者）と注目逸脱グループ（手遊び+外部）の2つのカテゴリーにまとめたものが図2-2である。

2つのカテゴリー分けしたものについて、 χ^2 検定をおこなったところ、演者Aと演者Bとの間（ $\chi^2_{(1)} = 42.16$, $p < .005$ ）、演者Aと演者Cとの間（ $\chi^2_{(1)} = 62.45$, $p < .005$ ）に、有意な差が認められた。演者Bと演者Cの間には大きな差は認められなかった（ $\chi^2_{(1)} = 3.12$, $p < .10$ ）。

演者Aと演者B・Cとの違いはどこにあったのか。ここまでに記述してきた情報では、2つの大きな違いが挙げられる。演者Aと演者Cとの違いは、紙芝居上演の経験回数が違っていたこと、演者Aと演者Bとの違いは、演じた作品が「物語完結型」と「観客参加型」とで違っていたこと、である。しかし、これらの関与を本研究では特定できない。

観客間の差異

次に、観客の個人差に着目して分析をおこなった。

表3に、11人の観察対象児が各演者の上演中に注目した対象を4つのカテゴリーに分けたものを示す。

それを注目維持と注目逸脱の2つのカテゴリーにまとめ、観察対象児ごとに棒グラフにしたものが、図3である。

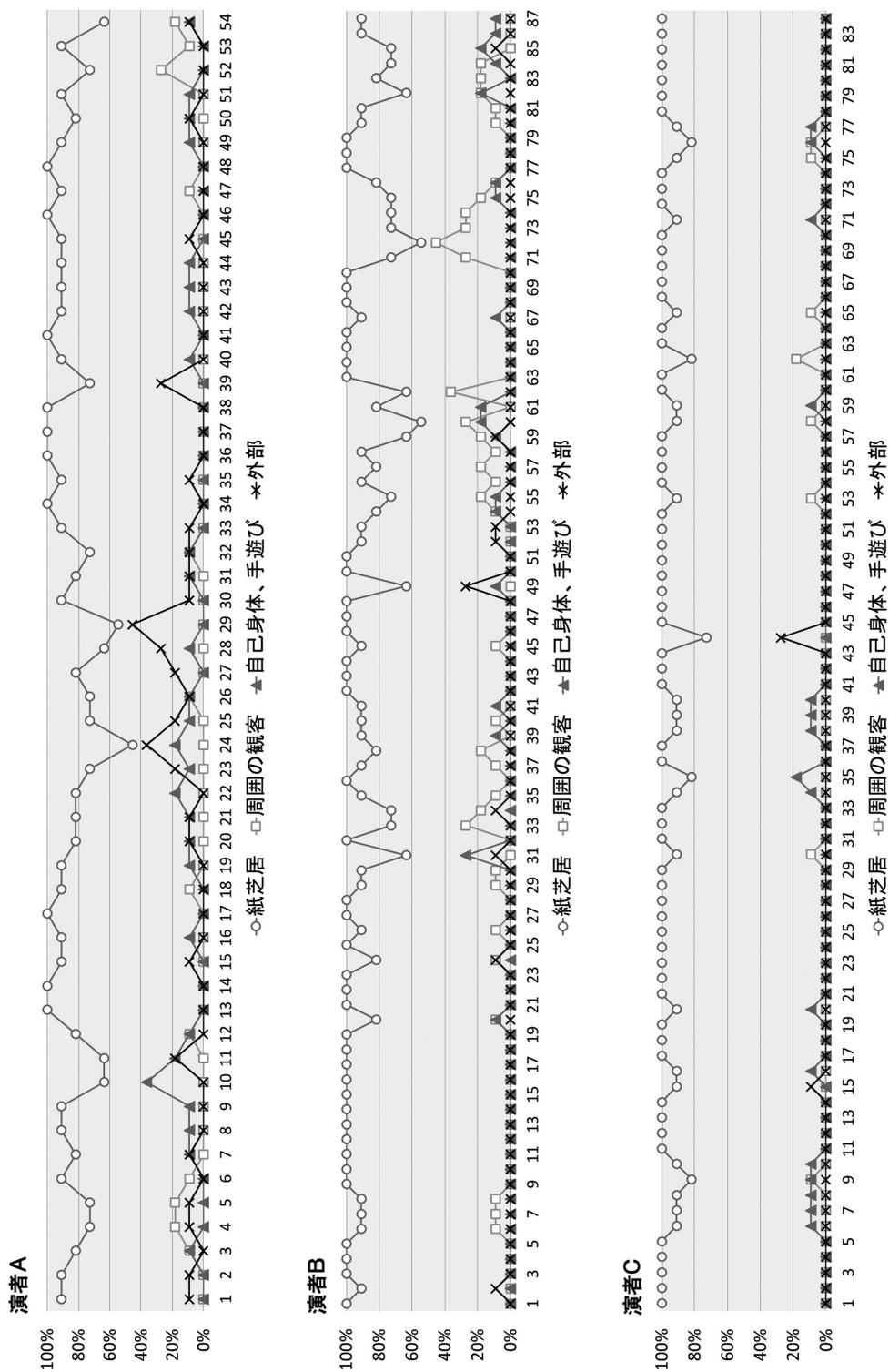


図1 各演者の上演に対する観客の注目対象の推移 (5秒ごとのサンプリング)

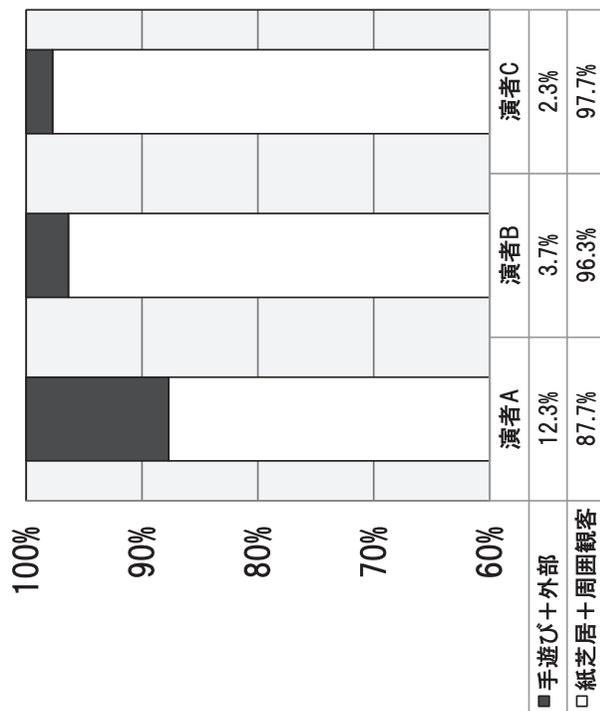


図2-2 紙芝居上演への注目対象(2カテゴリー)

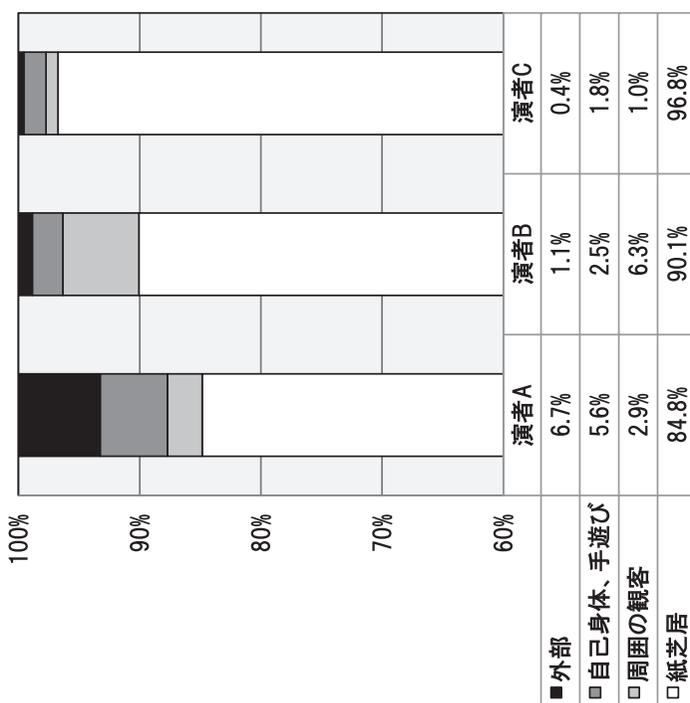


図2-1 紙芝居上演への注目対象
(4カテゴリー)

表3 各演者の上演に対する、全観客の注目対象

	注目対象			注目対象			注目対象				
	紙芝居	周囲の観客	身体、手遊び	紙芝居	周囲の観客	身体、手遊び	紙芝居	周囲の観客	身体、手遊び		
演者A				演者B			演者C				
観客1	48	2	0	観客1	74	6	1	観客1	76	0	7
観客2	50	1	0	観客2	75	4	7	観客2	82	1	0
観客3	32	4	7	観客3	73	11	2	観客3	78	3	3
観客4	46	1	4	観客4	79	6	2	観客4	83	0	1
観客5	24	7	16	観客5	58	26	3	観客5	84	0	0
観客6	54	0	0	観客6	86	0	1	観客6	83	0	0
観客7	51	0	0	観客7	86	0	1	観客7	84	0	0
観客8	49	1	3	観客8	83	3	0	観客8	77	1	6
観客9	49	1	1	観客9	80	2	5	観客9	84	0	0
観客10	50	0	2	観客10	84	1	2	観客10	83	1	0
観客11	51	0	3	観客11	84	1	0	観客11	80	3	0
合計	504	17	33	合計	862	60	24	合計	894	9	17
平均	45.82	1.55	3.00	平均	78.36	5.45	2.18	平均	81.27	0.82	1.55
標準偏差	9.21	2.16	4.86	標準偏差	8.24	7.57	2.14	標準偏差	3.00	1.17	2.62
カテゴリー比	84.8%	2.9%	5.6%	カテゴリー比	90.1%	6.3%	2.5%	カテゴリー比	96.8%	1.0%	1.8%

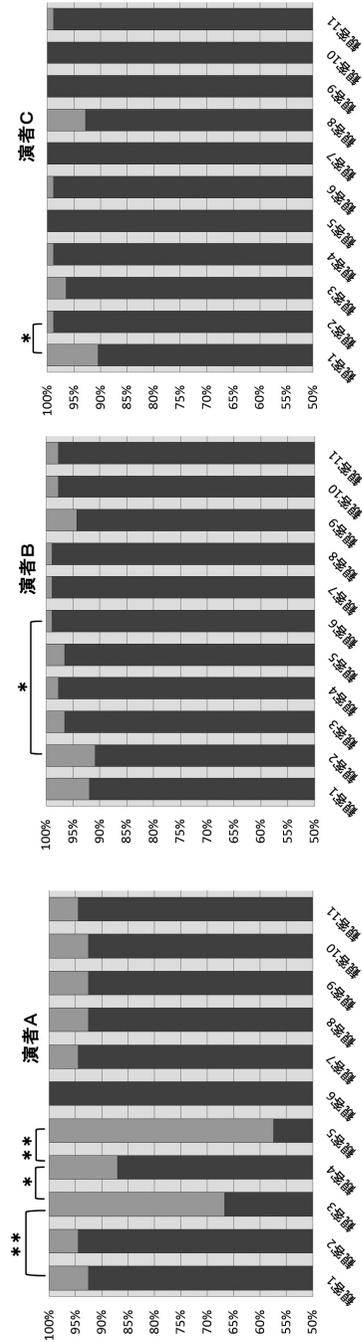


図3 各演者の上演に対する、各観客の注目対象（2カテゴリー）

■ 紙芝居+周囲観客 ■ 手遊び+外部 * * p<.01 * * p<.05

11人の観察対象児の注目対象には個人差が見受けられたが、他の園児と異なる注目をしてきた園児は、演者ごとに違っていた

χ^2 検定をおこなったところ、演者Aの上演では、観客3と観客5の注目逸脱が大きく、その2名同士には有意な差はなかったが、その2名ともに、その他のすべての観客との間に有意な差が認められた。

(観客5と観客4： $\chi^2_{(1)} = 11.82, p < .01$ ；

観客3と観客4： $\chi^2_{(1)} = 6.30, p < .05$ ；

観客3と観客1： $\chi^2_{(1)} = 11.19, p < .01$)

一方、演者Bの上演では、観客2のみが注目の逸脱が大きく、観客6、観客7、観客8との間に有意な差が認められた ($\chi^2_{(1)} = 4.22, p < .05$)。

また、演者Cの上演では、観客1のみが注目の逸脱が大きく、観客3と観客8以外のすべての他の観客との間に有意な差が認められた (観客2との差： $\chi^2_{(1)} = 4.23, p < .05$)。

上演する演者が異なると注目の逸脱が大きい観客が違っていた、ということは、特定の観客の個人的な特性によって、注目の逸脱が起きていたわけではない、ということの意味している。

特定の演者（あるいは演じ方）の特性と特定の観客がもつ特性との相互作用によって、注目の逸脱が誘発されたことが示唆される。

総合的考察

観客の注目対象に着目し、紙芝居の上演中の注目維持と注目逸脱の比率が、演者の違いや観客の違いによって異なっているかを調べた。その結果、演者の違いによって観客の注目行動が異なることが示され、また、その影響はすべての観客に対して同じように及ぶのではなく、観客によって及ぼされる影響に個人差があることが示された。

複数の演者による、複数の観客への紙芝居上演について、量的な視点で観察記録を分析することで、演者や観客の個人差の程度を把

握することができたが、これらの差が、どのような要因の作用によって生まれたものかを理解するには、さらに詳細な検討が必要となる。

例えば、今回の分析では有意な差が得られなかった、演者Bと演者Cに対する観客の反応であるが、図1を見ると、「紙芝居への注目」カテゴリーの推移に異なる傾向がうかがえる。

演者Cに対しては、ほぼ一定の水準で注目が保たれているが、演者Bに対しては上演の後半になるにつれて、紙芝居への注目度が少しずつ落ちていく傾向がある。しかし、グラフを丁寧に見ると、それは注目の逸脱の増加によるものではなく、周囲の観客への注目が時折増えるためであることが分かる。上演が進むにつれて、観客間での交流や対話が増えていった可能性もある。これについては、今回は分析で取り上げなかった、発言内容などの質的な側面の分析が必要である。

また、演者Aの上演に対して、注意逸脱が優位に多くなっていたが、観客別に見ると、その影響を大きく受けたのは11名中の2名であり、他の9名への影響は少ない。影響が大きかった2名と演者Aとの間にどのようなやりとりがあったのかも、質的な側面の詳細な分析によって明らかになる可能性がある。

したがって、より詳細で的確な理解を得るためには、今回取り上げた量的な視点と、要所所に対する質的な視点との組み合わせによる分析が望ましいと示唆される。

引用文献

まついのりこ (1998) 「紙芝居—共感のよろこび」, 童心社

柳田多聞 (2010) 「紙芝居にみられる観客のコミュニケーション行動」, 日本社会情報学会全国大会研究発表論文集, 25 (0), 82-85.

柳田多聞 (2011) 「紙芝居上演の心理学的研究の構想」, 長崎県立大学国際情報学部研究紀要, 第12号, 351-358.

柳田多聞 (2013) 「一幼児の紙芝居鑑賞中の反応行動」, 長崎県立大学国際情報学部研究紀要, 第14号, 255-264.